

アイヌ口承テキストに確認される2種類の修辞配列パターンについての資料

Two kinds of rhetoric sequence patterns checked by the Ainu oral texts

大喜多 紀明
アジア民族文化学会

Noriaki Ohgita
Association of Asian Folk Culture Studies

キーワード：アイヌ，口承文芸，配列パターン，修辞論
Key words : Ainu, Oral literature, Sequence patterns, Rhetoric theory

抄録

アイヌ口承テキストには，代表的な2種類の配列パターンを確認することができる。この2種のパターンは，交差対句法と呼称される対称性に富んだ修辞技法を基本としており，テキスト全体の領域に渡る構造的な規模を有する。本稿では，確認された2種の配列パターンを持つアイヌ口承テキストを紹介する。同時に，紹介したそれぞれのテキストの修辞的な視点による分析データを資料として提示している。

1. はじめに

アイヌの口承テキストには交差対句が修辞技法として汎用される^[1]。このような修辞論的な特徴がアイヌ民族の心性に一因すると筆者は解釈しており^[2・3]，これは本稿の前提でもある。筆者は，アイヌ口承テキストに確認される修辞的特徴についての調査が，アイヌ民族の心性や習俗を理解する上での有用な知見をもたらすと判断している。上記の視座に基づき，現在筆者は，アイヌ民族の口承テキストに確認される交差対句の形式を類型化する試みをしている。このことは，アイヌ口承の修辞的な特徴をより明確化するための知見となると考えている。

アイヌ口承テキストに確認される交差対句の類型化についての先行研究は現在まで報告されていない。したがって，筆者は，アイヌ口承テキストについて交差対句の分析を視点とした類型化を行う上での手始めの報告として，本稿を位置づけている。

本稿では，筆者が修辞的な視点による類型化を行う上で，便宜上，パターン①およびパターン②と呼称した分類に該当する口承テキストの事例ならびにそれらの修辞的な分析データを資料として提示している。ここで，全てのアイヌ口承テキストがこの2種のいずれかに類別できることを筆者

が主張しているのではない。むしろ，この2種のパターンにはあてはまらないテキストも存在している。本稿で紹介した2種以外の交差対句パターンについては，現時点で調査の途上であり，今後報告する予定である。

2. 2種類の交差対句パターン

本節では，アイヌ口承テキストに確認された2種類の交差対句パターンを，パターン①および②として示す。

2.1. パターン①

はじめに，パターン①を示す。このパターンでは，交差対句の折り返し箇所に，主人公もしくはそれ以外の存在が生命的危機やそれに類する転換点を迎える出来事が配置されているという特徴を持っている。極めてダイナミックな構造として描かれる場合が多い。以下に，交差対句の図式を示す。

パターン①

- I : 【緒言】
- II : 【暮らしA】
- III : 【移動A】
- IV : 【侵入】

- V :【緊張 A】
 V´ :【緊張 B】
 IV´ :【退出】
 III´ :【移動 B】
 II´ :【暮らし B】
 I´ :【結語】

ここで、I は、多くのアイヌ口承テキストの冒頭に描かれる、物語の主人公や舞台設定についての紹介が描かれた【緒言】箇所である。それに対して、I´には、これも多くのアイヌ口承テキストに確認される物語の教訓や結論が描かれた【結語】箇所である。また、IIの【暮らし A】は、テキストに記された一連の出来事が生じる前における暮らしの様子である。その一方、II´の【暮らし B】は、一連の出来事の後の暮らしが描かれた箇所である。IIIとIII´には、物語の主人公もしくは別の人物が移動する様子が描かれる。これを【移動 A】および【移動 B】とした。IVおよびIV´は、【侵入】および【退出】とした。ここでは、何らかの緊張を含む、主人公やその他の人物に変化をもたらす「環境」に、主人公が侵入する場面【侵入】と退出する場面【退出】である。そして、このパターンの中央に据えられた【緊張 A】と【緊張 B】では、主人公の「生命的危機」、もしくはそれに類する何かしら主人公自身か他の人物に変化をもたらす緊張感を伴った事柄が配置されている。

本節で示した構造、もしくはそれに類する特徴をもつパターンを、本稿では便宜上パターン①とした。

2.2. パターン②

続いて、パターン②である。このパターンは、交差対句の折り返し部位が比較的広く、かつ、折り返し部位の前半箇所と後半箇所が対照的な意味を持つ。この対照的な箇所のみをみると並行法（パラレリズム）にも見える。以下に、交差対句の図式を示す。

パターン②

- I :【緒言】
 II :【暮らし A】
 III :【並行箇所 A】
 III´ :【並行箇所 B】
 II´ :【暮らし B】
 I´ :【結語】

ここで、IとI´、IIとII´については、パターン①の場合と同様に【緒言】と【結語】、【暮らし A】と【暮らし B】が配置されることが多いが、テキストによっては、この部位が省略されているものもある。IIとII´は一見すると並行法（パラレリズム）に類する対比記事が書かれた箇所である。このいわゆる並行箇所がテキスト中の広範囲に渡るという特徴をこのパターン②は持っている。

本節で示した構造、もしくはそれに類する修辭的パターンを本稿ではパターン②とした。

3. 2種類の交差対句パターンに該当する口承テキスト

本節では、前節で紹介した2種類のパターンに該当するアイヌ口承テキストの事例を資料として紹介する。それぞれのテキストについて、はじめにテキスト全文を引用し、その後に交差対句を示す。なお、それぞれのテキストに付された下線・記号は筆者によるものであり、全てのテキストの口承話者の敬称は省略している。

以下、3.1.節ではパターン①の事例を5例、そして3.2.節ではパターン②の事例を3例紹介する。

3.1. パターン①の事例

本節ではパターン①に該当すると筆者が判断したテキストを5例示す。

3.1.1. 「小ザルが一匹」

次に示す資料は、平賀サダによる口承テキスト「小ザルが一匹」¹⁴⁾を田村が日本語に翻訳した訳文全文の引用である。

A 昔話はねえ、すこし大きい子供らにゆうの。
それはねえ、
お話してあげるから聞きなさい。
子供たち、昔話をするから聞きなさい。
さあ座ってよく聞きなさい。
とってもすてきなお話をしてあげるからね。
そう言ったら、遊んでがやがやがやがやうるさ
いから、あんまりうるさくて。
そしたらみんな座るでしょ？どんなお話ゆって
くれるんだろと思って、そうしたら…
 ずっと遠く、小ザルが一匹、ずうっと遠く、木の上で遊んでいました。（そこに小ガメが一匹、あ、あ）、サルが一匹、B 木の上で遊んでいた

のですが、さびしくなったものですから、浜に下りて行って、C 岩の上に乗っていました。いろいろな魚が泳いでいるのを見て、喜んで、しばらく見ていました。

するとそこに、小ガメが一匹あがって来ました。「さあさあ、僕についておいで。遠く（海）海の真ん中に、海の真ん中を治める神様がいる所、神様の家がある所を見せてあげるから、さあ、僕と一緒においで、おいで」と言いました。

「どうやって君について行くの？とサルが言いますと、「そら、僕の上にお座り、僕の上に座れば、連れて行ってあげるよ。」とカメが言いましたので、D その上に乗って、それからずうっと行くと、海の水の湧き出す所があって、そこから入りますと、きれいな砂浜があって、そこに行きますと、きれいな神様の家があって、それから、神様の家の所で、門口に行きますと、（そのサルは、）

E 「ここで待ってて！」とカメが言って、F カメは、神様の家の中に入って行ってしまいました。

G サルはそのあと、ずうっと待っていました。ひとりで帰る帰り方もわからないので、待っていますと、クラゲが一匹、門の所に立っていて、そして、こう言いました。H 「サル君、何をしに来たの？心臓をとられに連れられて来たことを、君は知っているのかい？」と言いました。

サルはびっくりしました。ですから、クラゲは今度は、H 「この、神様のお嬢様が、ひとり娘なのだけれど、お具合が悪くて、ご病気で、君の心臓を食べなければ、私の病気はよくなりませんとおっしゃって、君の心臓をとるために、君は招かれて来たんだよ。」と言いました。

G サルはひどくびっくりしました。するとそこに、F カメが家から出て来て、E 「さあ、中に入ろう。」と言いました。

けれどもサルは「ああ困ったなあ！あそこに、僕の心臓を、木の上に干してあったのを、干しておいたのを、忘れて来ちゃったなあ。忘れて、（ついて）連れられて来た。とって来なくちゃならないよ。」と言いました。すると、「えっ！心臓を持たずに来たんじゃないか。」と、カメは思いましたから、D サルを連れて、陸へ戻って行きました。

それでまたC 岩の上へ、そのサルはピョンと飛び乗って、ずうっと山の上までのぼって行っ

て、一番高い山の上までのぼって行って、木登りしてB 木の上ののぼって、遊んでいます。小ガメは待っていましたけれども、サルはなかなか下りて来ません。とうとう、しかたがないものですから、戻って行きました。それから、「きっとあの、しょうのないクラゲのやつが、そうしゃべって聞かせてしまって、それで、逃げたいものだから、陸へ降りたがったんだな。」と思いました。それで、そのクラゲは、骨を全部抜かれてしまい、罰として骨を全部引き抜かれて、それで、クラゲというものは、骨がなくなったというわけです。

A というお話です。

テキストに施された記号・下線箇所を配列すると次のように表現できる。

A 紹介

B 木の上で遊ぶサル

C 岩の上に乗るサル

D サルがカメに乗って海の神の所へ行く

E カメの言葉「ここで待ってて！」

F カメが海の神の家に入る

G 待っているサル

H クラゲの言葉「サル君、何をしに来たの？心臓をとられに連れられて来たことを、君は知っているのかい？」

H カメの言葉「この、神様のお嬢様が、ひとり娘なのだけれど、お具合が悪くて、ご病気で、君の心臓を食べなければ、私の病気はよくなりませんとおっしゃって、君の心臓をとるために、君は招かれて来たんだよ。」

G サルが驚く

F カメが海の神の家から出てくる

E カメの言葉「さあ、中に入ろう。」

D サルがカメに乗って陸へ戻る

C 岩の上に乗るサル

B 木の上で遊ぶサル

A 結語

A にはこの物語の紹介が書かれているのに対し、A にはこの物語の結びの言葉が書かれている。B と B は、共に、木の上で遊ぶサルの様子がある。また、B と B は、共に、岩の上にサルが乗っている場面である。そして、D はサルがカメの背に

乗って海の神の元に連れて行かれる場面であるのに対し、D´は、逆に、サルがカメに乗って海の神の元から陸へと戻る場面である。

EとE´には、カメがサルに話しかける場面が書かれている。Eの「ここで待ってて！」とE´の「さあ、中に入ろう。」は、互いに正反対の意味を持っている。また、Fではカメが家の中に入っていく様子が描かれているのに対しF´では、逆に、カメが家から出てくる様子が描かれている。GおよびG´はクラゲに会う前後でのサルの様子であり、HとH´には、サルに話しかけるクラゲの言葉が配置されている。

このように、「小ザルが一匹」は合計8対の対応からなる交差対句が骨格的な表現手法である。

ここで、上記の交差対句構造をパターン①と対応させると以下ようになる。

◆パターン①と「小ザルが一匹」の対比

〈パターン①〉	〈テキスト〉
I :【緒言】	: A
II :【暮らし A】	: B・C
III :【移動 A】	: D
IV :【侵入】	: E・F
V :【緊張 A】	: G・H
V´ :【緊張 B】	: G´・H´
IV´ :【退出】	: E´・F´
III´ :【移動 B】	: D´
II´ :【暮らし B】	: B´・C´
I´ :【結語】	: A´

まず、AとA´は、物語の紹介と結論部位であるので、それぞれ【緒言】と【結語】に相当している。また、BとCは、この物語での出来事が生じる前における「サル」の暮らしが描かれた箇所である。一方、B´とC´は、出来事の後における「サル」の暮らしが書かれている。

Dは、「サル」が「カメ」と一緒に、「陸」から「海の神の家」のところへと移動する場面である。一方のD´は、逆に、「陸」へと戻る場面である。したがって、DとD´は【移動A】と【移動B】となる。ここで、このテキストの場合、【移動A】と【移動B】は逆向きの「移動」であるのだが、テキストによっては、逆向きではない場合もある。

「サル」の移動

【移動A】: 陸 → 海の神の家

【移動B】: 海の神の家 → 陸

E・Fでは、「カメ」が「サル」を「家」の外に待機させて「家」に入る場面である。「カメ」が「家」に侵入することで、V【緊張A】・V´【緊張B】の場面を迎える環境が設定される。一方、E´・F´では、「カメ」が「家」から退出し、「サル」に入室を促すのであるが、「サル」はそれを拒絶する。このように、E・FとE´・F´は、「カメ」の立場からみると、「家」への【侵入】・【退出】である。同時に、主人公である「カメ」にとっても、自らが「生命的危機」の状況であることを「クラゲ」によって告知される環境へと【侵入】し【退出】する場面でもある。

G・HとG´・H´は、この物語のクライマックスである。「サル」は「クラゲ」と話をし、主人公である「サル」が「生命的危機」を迎える。したがって、G・HとG´・H´は【緊張A】および【緊張B】である。

3.1.2. 「和人の夫をもった石狩の女の話」

続いては、田村が採録した「和人の夫をもった石狩の女の話」^[5]の場合である。

短いを話すよ、簡単な。簡単すぎて、こまごまと詳しいことは言わないで話すの。これ（マイク）に向かって話すから

A 私は石狩に住む女です。 B シナの木の皮を剥いで縄をなつて、和人のところへ背負って行つては、米と交換して来て、それを食べていました。 どうしてこのようにひとりでいたのかわかりませんが、気がついたら、私は、だれもない家に、行器や宝器や宝刀が、家いっぱいにある、古い家にいたのです。 私はシナの木の皮を剥いで、縄をなつて、売ります。 和人のところへ背負って行きますと、いろいろな、和人が食べる食べ物、上等な食べ物と交換して、それを食べながら暮らしていました。 ところが、ある日、「シナの木の皮を剥ぎに、小鍋や食べ物を背負って、泊まりがけで山へ行ったら、たくさんシナの木の皮を背負って来られるから」と思いましたので、泊まりがけで山へ行きました。そして私の家からずっと離れて行って、泊まろうと思うところに、木のこずえに小さな鍋も、白米も結びつけました。

「晩にそこに泊まりましょ」と思いましたから、

柴木を集めて、置いて、それからシナの木皮を一生懸命剥ぎました。

「C 日が暮れたら(木から剥ぎ取った)皮を(外皮と内皮に)剥ぎ(分け)、一晩中皮を剥いで、明日背負って帰しましょう」

と、思いましたから、それから精を出して(木から皮を)剥ぎ続けて、もう日暮れになりました。すると、あの、私が泊まろうと思っていた場所に、カラス、沢山のカラスが集まって、そして、あの私の白米をつつついて、ばらばらに散らかしています。

晩に私が食べようと思っていたものが、全部散らかされている有様でした。

D それから私は泣きながら大声でどなりつけました。棒を振り回しながら大声で叱りつけても、なおいっそう沢山のカラスが集まってきます。

そして、あの小鍋も落とされてこわれ、あの白米も散らかされてしまいました。

「もう晩になったのに、何を食べましょう。これでは、どうして一晩をすごしたらいいのかしら」とも思いました。

E 腹立たしく思いながら山を下って行きましたところ、その小さい鍋も傷まないでそのままあって、白米もそのまま、カラスも1羽もいた形跡がありません。

まぼろしを見たのでした。

それから、F その場所に泊まるのも恐ろしいので、G その場所からほかのところに適当な場所をさがしましたところ、H 根こそぎ倒れている、大きな太い木、葉がいっぱいついた木がありましたが、その葉がいっぱいついた木のこずえのところに泊まったら、実にいいあんばいらしく、その辺を歩き回りますと、そうした様子ですから、それから、その葉のいっぱいついた木は、夏に倒れた、葉のいっぱいついた木ですから、葉も乾き、木も乾いていたのを、I 私は木を切って切って、天をこがすような大きな火をたいて、それからさっきの私のシナの木皮を背負ってはどんどん運んで来て、火のそばにいっぱい積んで、それから炊事をして食べました。

そしてそれからまた、J 皮をむいていましたところ、さっきの、シナの木皮を剥いでいた場所に、K 星のようなものがふたつ、交互に上がったり下がったりしているのが見えました。

熊を、暗いとき見ると、こんなふうなのだと言っていたが、K 星がふたつ、交互に

上がったり下がったりしているように見えるのは、覚悟をきめなければならないほど危険なことなので、それから、J そのシナの木皮の、かすの部分の皮がたくさん山になるくらいあったのですが、そのI 大きく燃えている火の上でその皮をぽっと投げますと、火がスッと消えました。ですから、そのたいたH 火のそばに折れ木があるのですが、G 私は着物をサッと脱いで、その折れ木にその着物を着せ、人が座ったようにして置いて、それから暗いうちに、ただ下着1枚だけ着て、走って、石狩川は水が少ない時は沢ぐらいで、水が多くなると沼のような大きな川になるのですが、その時は川が水がなくなって沢のようになっていた時でしたが、私は川を歩いて渡って、向こう岸へ上がったのでした。F もう秋口で、寒い時期ですから、着ている物がバリバリ凍って、下着1枚しか着ないで、夜中に家に帰るのも恐ろしいものですから、E それから、縄を買ってもらっている和人の家へ、一目散に走って、D オイ、オーイと叫びながら行きました。そして訴えますと、和人たちは私を知っているものですから、起き出して、「いったいどうしたのかい?」と言いましたが、「こういうわけで逃げてきました」と話しますと、その和人たちは武装し、鉄砲を持った人々が集まりました。

そして、

「C じきにもう夜が明けて、明るくなるのを待つから」

とみんなは言いました。夜が明けると、私はみんなと一緒に、私の家へ行きました。みると私のあとから来たらしく、その家いっぱいにあった行器も粉々にこわされて、鍋も粉々にこわされており、私の寝床はござで作ったものでしたが、そのござもふたつにもみつつにもちぎれて、私の家だったものは、ばらばらに散らかされ、恐ろしい光景になっていることを聞いて、私は、その場で、大声でわあわあ泣いていますと、和人たちがこう言いました、

「B あなたの家は、そこにあなたが住まなくても、私たちの家のそばに、家を作ってあげるから、仲良く一緒に暮らそう。食べ物も食べさせてあげるから、泣くのをやめなさい」と、よいことをふたつもみつつも言ってなだめてくれました。

それから、私が恐ろしい思いをした、シナの木

の皮を剥いていた場所に、またみんなに伴われて行きますと、あの折れ木にかぶせて、置いていった私の着物がビリビリに裂かれ、あの、私がたいた火も散らかされ、それから、山へ逃げていった跡がありました。

それからその私の家に、私の父も母もいたからこそ、先祖の家、立派家なのの中で、私はものごころついたのですが、

「こんなふう先祖の持ち物がこわされてしまったんだわ」

と思っ、わあわあ泣いていますと、和人方がよいことをふたつもみつつも言ってなだめてくれました。

「和人の村に入っても、あなたがだんなと仲良く幸せに暮らせるように、あなたが食べていけるようにしてあげるから」

と私に言いながら、和人の家へ私を連れて行って、和人の女が着る着物、和人の女がつける美しい帯も、私につけさせてくれました。きれいな小さい家を和人の家の前に作ってもらって、そこに私は住みました。

「これからは、縄をなわなくても、山歩きをしなくても食べられるようにしてあげるから」

と言われて、すてきな若い和人の夫を与えられ、和人の夫を持って、和人の家の前に住んで、和人との間に子供ができたのですから、美しい和人の子供のような子供がたくさんできましたけれど、私はアイヌの女で、あとから入った、和人の村に、入れてもらったのですから、私の息子たちがでしゃばったり、私の娘たちがでしゃばったりすると、

「お前はアイヌの子だぞ」

と悪口を言われるから、決してでしゃばらないでつつしみ深くおつき合いなさい。

A´と立派な奥様が言いました。

上記の A・A´ から K・K´ に至る対応箇所を順に配列すると次のように表現できる。

- A 石狩に住む女の紹介
- B 古い家とアイヌの暮らし
- C 日暮れ 沢山のカラスが白米を散らかす
- D カラスを大声でどなりつける 沢山のカラスが集まる
- E 山を下る
- F その場所に泊まるのが恐ろしい

- G 「適当な場所」をさがす
- H 倒木を見つける
- I 大きな火をたく
- J シナの木の皮をむく
- K 熊が近づく
- K´ 熊が近づく
- J´ シナの木の皮のかす
- I´ 火を消す
- H´ 折れ木
- G´ 「適当な場所」から逃げる
- F´ 家に帰るのが恐ろしい
- E´ 和人の家へ走る
- D´ オイ、オーイと叫ぶ 和人が集まる
- C´ 夜明け 家が散らかされる
- B´ 新しい家と和人との暮らし
- A´ 立派な奥様の話

この交差対句をパターン①の図式と対応させると次のように表現できる。

◆パターン①と「和人の夫をもった石狩の女の話」の対比

〈パターン①〉	〈テキスト〉
I : 【緒言】	: A
II : 【暮らし A】	: B・C・D
III : 【移動 A】	: E
IV : 【侵入】	: F・G
V : 【緊張 A】	: H・I・J・K
V´ : 【緊張 B】	: H´・I´・J´・K´
IV´ : 【退出】	: F´・G´
III´ : 【移動 B】	: E´
II´ : 【暮らし B】	: B´・C´・D´
I´ : 【結語】	: A´

ここでの折り返し箇所は K・K´ である。主人公の「女」は、K・K´ において生命の危機に晒されており、非常に緊迫した場面となっている。ここで「女」は智恵を使い、暗闇の中から襲ってこようとする熊を避けた。この場面は、前節の「小ザルが一匹」の H・H´ と類似している。「小ザルが一匹」では、サルは智恵を使い、心臓を取られないようにした。したがって、「和人の夫をもった石狩の女の話」では、主人公が「生命的危機」を迎える K・K´ とその環境での描写である H・I・J・K・K´・J´・I´・H´ は【緊張 A】・【緊張 B】に相当している。

この「生命的危機」を迎える環境への【侵入】と【退出】は、 $F \cdot G$ と $F' \cdot G'$ である。

E と E' は、【移動A】と【移動B】である。ここで、「小ザルが一匹」の場合は、「陸」と「海の神」の住む場所との往復であった。それに対して、「和人の夫をもった石狩の女の話」は、主人公が元々住んでいた家から「生命的危機」を迎える環境への移動と、その環境から新しい家への移動であり「往復」ではない。

「女」の移動

【移動A】：古い家 → 山の宿营地

【移動B】：山の宿营地 → 新しい家

$B \cdot C \cdot D$ は物語の出来事の前における暮らしが描かれており、一方、 $B' \cdot C' \cdot D'$ には出来事後の暮らしが書かれている。

A と A' は、【緒言】と【結語】である。

3.1.3. 「人食いおばけ」

さらに、知里真志保の『えぞおばけ列伝』^[6]に掲載された「人食いおばけ」をみる。以下の文章は、「人食いおばけ」の全文を転記したものである。

A 私はウラシベツの村に姉さんと二人で暮していた。姉さんは神さまのように美しい人だった。そして、自分から言うのもなんだが、私も負けないくらいの美人だった。

B ある日、姉さんとふたりで、囲炉裏の中にはさんで針仕事をしながら、四方山嘯をしていると、C もう日も暮れようとする頃、戸外に人の歩く足音がして、D 誰か咳ばらいをしながら入って来た。見ると恐しく背の低い、色の黒い、みっともない顔の男で、私のうしろを通過して横座にどっかと腰をおろし、そのまま何を言うでもなく、何をするでもなく、私たちの上をじろじろ見ながら大あぐらをかいて坐っているのだった。姉さんも私も知らんふりをしていた。

E やがて日も暮れたので、姉さんが立って夜食のしたくをととのえ、私のお膳を私の前にすえ、自分のは自分の前において、どこから捜し出したのか、ぶっ欠けお椀の底にちよっぴり食物を入れて、小男の前におしやった。

私たちがせっせと食べていると、小男は私たちの健啖ぶりを呆れ顔に眺めていたが、F やがて

言うことには、

「こら女ども、見ているとお前らの上の口は、恐しく食いしん坊のようだが、下の方の口はどうなんだい？」

F' すると、よもや姉さんがそんな返答をしようとは思わなかったのに、

「ええ、ええ、下の口だって食べますよ。でも普通食物じゃ満足しないんです。私たちの下の口の食べものは人間、それも生きた男の人ばかり……。E' 背の高い男の人なら、呑めば足だけ外へ残るけど、背の低い男の人なら、丸呑みにしてしまうんですよ」

D' それを聞くやいなや、小男はいきなり立ちあがって、あわてて戸外へ飛びだし、C' どこかへ消えてしまった。

B' そのあとで、姉さんは腹を抱えて大笑いをしてながら、言うことには、

「これ妹、よくお聞き。私は小さい時から巫力にたけていて、偉い神さまでも偉くない神さまでも、魔物たちでも、どこで何をしているか、いながらにしてよく分るのです。この人間の国の背後の山の中に、カワウソの魔が兄弟二人で住んでいて、神々の中にも気に入るような娘が見つからないので、人間の国を見わたすと、私たち二人の美貌が目にとまったのです。そこで私たちが殺して魂を奪って妻にしようと、神々の目を盗んで山を降り、兄の方は村の背後に隠れて、弟だけここへ来たのです。ところが私があんなことを言ったものだから、魂が転げ落ちるほどびっくりして、兄の隠れている所へ息せき切って駆けつけ、

“人間の女どもが普通食物を食うなら、痛くもかゆくもないが、男を食うんだそうだ。しかも背の低い男だと、丸呑みにしてしまうというから、俺たちなんかは丸呑みの範疇に属するわけだ”

と復命すると、兄もびっくり仰天して、

“そいつは陰呑な話だ。危なくメノコの下の口に丸呑みにされるところだったわい”

と言って、二人で逃げてしまったのです。A' 魔などというものは他愛もないもので、諺にもあるとおり、言われたことをそのまま信じこむものだから、私たちの下の口が生きた男の人を食うなどという、とんでもないでたらめにだまされて、今はもう遠い遠い所へ逃げてしまったから、これからは何の恐いこともありません」

このテキストには次のような交差対句を確認することができる。

- A 姉妹の紹介
- B 姉妹の暮らし(姉妹の四方山嘯)
- C 足音が近づいてくる
- D 小男が家に入ってくる
- E 姉妹の健啖ぶりに驚く小男
- F 「下の口」はどうだ?
- F´ 「下の口」についての説明
- E´ 人を丸呑みにする「下の口」
- D´ 小男が家から出て行く
- C´ どこかへ消えてしまう
- B´ その後の暮らし(姉から妹への言葉)
- A´ これからは恐ろしいことはない

ここで、見出された交差対句をパターン①にあてはめると次のようになる。

◆パターン①と「人食いおぼけ」の対比

〈パターン①〉	(テキスト)
I :【緒言】	: A
II :【暮らし A】	: B
III :【移動 A】	: C
IV :【侵入】	: D
V :【緊張 A】	: E・F
V´ :【緊張 B】	: E´・F´
IV´ :【退出】	: D´
III´ :【移動 B】	: C´
II´ :【暮らし B】	: B´
I´ :【結語】	: A´

A と A´には姉妹の紹介と物語の結論が書かれている。この箇所は、【緒言】と【結語】である。また、B と B´は、物語に書かれた一連の出来事の前後における「姉妹」の暮らしが描かれているので、【暮らし A】と【暮らし B】に相当する。

C では、誰知らぬ足音が近づいてくる様子が描かれており、C´には、逆に、足音の主であった「小男」が外に出てどこかに消えてしまう様子がある。言い換えれば、「小男」の「移動」の様子が描かれた箇所である。ここで、上述のテキスト「小ザルが一匹」と「和人の夫をもった石狩の女の話」では、主人公である「サル」や「女」が【移動】をしていた。また、その【移動】によって、主人公

は【緊張 A】および【緊張 B】を迎える環境に【侵入】・【退出】することになる。それに対して、「人食いおぼけ」では主人公の「移動」ではなく「小男」の「移動」である。しかしながら、「小男」は「移動」によって【緊張】の環境へと【侵入】・【退出】することになる。このことから、「人食いおぼけ」の場合は主人公の「移動」ではないのだが、この箇所(C・C´)を【移動 A】・【移動 B】としても差し支えないと筆者は判断した。

「小男」(主人公ではない)の移動

【移動 A】: 小男が姉妹の家に向かう

【移動 B】: 小男が姉妹の家から逃げる

D・D´は、【緊張】をもたらす環境への【侵入】および【退出】である。

E・F´では、「小男」が、姉妹たちの健啖ぶりに驚きながらも、姉妹たちを殺すきっかけを伺っている場面である。しかし、F´では姉の機転によってその難を逃れ、逆に、「小男」が恐れをなす場面となる。したがって、この箇所は、主人公が「生命的な危機」および「分岐」を迎える環境での出来事であるので【緊張 A】・【緊張 B】に該当する。

3.1.4. 「谷地の魔神が自ら歌った謡『ハリツクンナ』

以下に記載する「谷地の魔神が自ら歌った謡『ハリツクンナ』(以下、「ハリツクンナ」とする.)には、筆者による各行頭の数字が付されている。なお、「ハリツクンナ」が掲載されている『アイヌ神謡集』^[7]では基本的に「サケへ」が省略されている関係上、それに準じ、下記の引用テキストでも冒頭箇所以外の「サケへ」は省略されている。

- 1 ハリツクンナ
- 2 A ある日に好いお天気なので
- 3 私の谷地に眼と口とだけ
- 4 出して見ていたところが
- 5 B ずっと浜の方から人の話し声がきこえて来た。
- 6 見ると、二人の若者が連れだって来た。
- 7 先に来た者は勇者らしく勇者の品を
- 8 そなえて、神の様に美しいが
- 9 後から来た者を見ると、様子の悪い
- 10 顔色の悪い男で、何か話し合いながら
- 11 やって来たが私の谷地の側を通り

- 12 ちょうど私の前へ来ると、あとから来た顔
色の悪い男が
- 13 立ち止り立ち止り自分の鼻をおおい
- 14 「おお臭い、いやな谷地、悪い谷地の前を
通ったら
- 15 まあ汚い、何だろうこんなに臭いのは。」
16 と言った。
- 17 C 私はただ聞いたばかりだけれど自分の居
るか居ないかも
- 18 わからぬほど腹が立った。
- 19 泥の中から飛び出した。私が飛び上ると
20 地が裂け地が破れる。牙を
- 21 鳴らしながら、彼等を強く追っかけたところ
が
- 22 先に来た者は、それと見るや
- 23 魚がクルリとあとへかえる様に引っかけし
て顔色の悪い男の
- 24 わきの下をくぐりず一っと逃げてしまった。
- 25 青い男を二間三間追っかけると
- 26 直ぐ追いついて D 頭から呑んでしまった。
27 そこで今度は彼（か）の男をありったけの
速力で追っかけて
- 28 人間の村、大きな村の後へ着いた。
- 29 E 見るとむこうから
- 30 火の老女、神の老女があかい着物、六枚の
着物に
- 31 帯をしめ、六枚の着物を羽織って
- 32 あかい杖をついて私の側へ飛んで来た。
- 33 「これはこれは、お前は何しにこのアイヌ
村へ
- 34 来るのか、さあお帰り、さあお帰り。」
- 35 言いながら、あかい杖、かねの杖をふり上
げて私を
- 36 たたくと、杖から焰が
- 37 私の上へ雨の様に降って来る。
- 38 F けれども私はちっとも構わず、
- 39 G 牙打ち鳴らしながら彼の男を
40 追っかけると、彼の男は村の中を
- 41 よくまわる環の様に走って行く。 G その
あとを飛んで
- 42 行くと、大地が裂け大地が破れる、村中は
大さわぎ
- 43 妻の手を引く者、子の手を引く者、泣き叫
び
- 44 逃げゆくもの、煮えくりかえるようなあり
さま、 F けれども
- 45 私は少しも構わず、土吹雪
- 46 をたてる、E 火の老女神は私の側を走って
来ると
- 47 大へんな焰が、私の上に飛び交う、
- 48 D その中に、彼の男は一軒の家に
49 飛び込むと直ぐにまた飛び出した。
- 50 見ると、蓬の小弓に蓬の小矢をつがえて
51 むこうから、ニコニコして、私をねらって
いる。
- 52 それを見て私は可笑しく思った。
- 53 「あんな小さな蓬の矢、何で人が苦しむも
のか。」と
- 54 思いながら私は牙を打ち鳴らして、
- 55 頭から呑もうとしたら
- 56 その時彼の男は私の首ッ玉を
- 57 したたかに射た。それっきりどうしたか
58 わからなくなってしまった。
- 59 ふと気がついて見たところが
- 60 大きな竜の耳と耳の間に私はいた。
- 61 村の人々が集って、彼（か）の私が追っか
けた若者が
- 62 大声で指図（さしず）をして、私の屍体を
みんな細かに刻み
- 63 一つ所へ運んで焼いてその灰を
- 64 山の岩の岩の後へ捨ててしまった。
- 65 今になってはじめて見ると、それは、ただ
の人間
- 66 ただの若者だと思ったのは
- 67 オキキリムイ、神の勇者であった。
- 68 恐しい悪い神、悪魔神、私はそれであって
69 人間の村の近くにいるので、
- 70 C オキキリムイは村の為を思って、私をお
こらせ
- 71 自分を追いかけさせて、蓬の矢で私を殺し
たので
- 72 あった。それから、先に私が呑んでしまっ
た
- 73 青い男は、人間だと思ったのだったが
- 74 B それは、オキキリムイがその放糞を人に
作り、
- 75 それを連れて来たのであった。
- 76 A 私は魔神であったから今はもう
- 77 地獄のおそろしい悪い国にやられたのだから
ら
- 78 これからは、人間の国には、なんの危険も
79 ない、邪魔ものもないであろう。

- 80 私は恐しい魔神であったけれども、
 81 一人の人間の計略にまけて
 82 今はもう、つまらない死方、悪い死方をす
るのです。
 83 と谷地の魔神が物語りました。

付された記号・下線部分を配列すると次のように表現される。

- A 谷地に棲む龍
 B 二人の若者との出会い
 C 腹を立てる龍
 青い男の記述
 D 青い男を頭から呑み込む
 →村へ
 E 火の老女 杖から焰
 F ちっとも構わない龍
 G 彼の男を追いかける龍
 男は環の様に走る
 G' 男のあとを飛んでいく龍
 村人は逃げ、煮えくりかえるような様
 F' 少しも構わない龍
 E' 火の老女 大へんな焰
 D' 彼の男を頭から呑み込もうとする
 →黄泉へ
 C' 龍を怒らせたのは計略だった
 青い男の記述
 B' 二人の若者の正体
 A' 地獄に送られた龍

この A・A'～G・G' を、パターン①に対応させると次のように表すことができる。

◆パターン①と「ハリツ クンナ」の対比

〈パターン①〉	〈テキスト〉
I :【緒言】	: A
II :【暮らし A】	: A
III :【移動 A】	: B・C
IV :【侵入】	: D
V :【緊張 A】	: E・F・G
V' :【緊張 B】	: E'・F'・G'
IV' :【退出】	: D'
III' :【移動 B】	: B'・C'
II' :【暮らし B】	: A'
I' :【結語】	: A'

このテキスト「ハリツ クンナ」では、はじめ(A)に、谷地に棲む「龍」についての紹介がある。それに対して、最後(A')には、地獄に送られて、既に谷地には棲んでいない「龍」が描かれている。ここで、「ハリツ クンナ」はカムイユカラであるので、カムイ(ここでは谷地に棲む「龍」)が一人称として描かれているので、本テキストの主人公は谷地に棲む「龍」である。したがって、Aは「オキキリムイ」と出会ってからの一連の出来事の前における「龍」の暮らしでもある。また、A'は、出来事後の「龍」の暮らしである。このことは、Aが【緒言】と【暮らしA】に、A'は【結語】と【暮らしB】にあてはめられることを示している。

B・Cについては、「龍」が「オキキリムイ」を追いかけて「アイヌの村」へと移動する場面である。その一方、B'・C'では、「龍」が「オキキリムイ」によって殺され、地獄へと送られる場面である。この場合も、「和人の夫をもった石狩の女の話」と同様に「往復」による移動ではない。

「龍」の移動

- 【移動A】: 谷地 → アイヌの村
 【移動B】: アイヌの村 → 地獄

Dは、「龍」が「アイヌの村」に侵入する場面である。それに対し、D'は、「オキキリムイ」に「龍」が殺される場面である。したがって、DとD'は【侵入】と【退出】に該当する。

E・F・GとE'・F'・G'は、「龍」が「アイヌの村」の中で行った事柄が描かれている。当初、「龍」は怒りにまかせて人々を追い回す。ところが、一転し、「オキキリムイ」が「龍」を殺す場面へと移行する。換言すれば、「龍」は突如「生命的危機」に直面し、実際に殺されてしまうのである。つまり、この箇所は【緊張A】・【緊張B】に該当する。

3.1.5. 「小沙流の人」

本節で紹介する「小沙流の人」^[81]は、メノユカラにジャンル分けされる。また、構造的には概ね、パターン①として類別できるのだが、【緊張A】および【緊張B】に「生命的危機」や「分岐」が明確には見出せないという特徴を持つ。以下、日本語訳されたテキストを引用転記する。

1 Aへイヌ 小沙流の人の

- 2 ヘイヌ 膝の上を
 3 ヘイヌ トントンたたきながら
 4 ヘイヌ 私はこう言いました。
 5 **B** ヘイヌ 「メナシの女は
 6 ヘイヌ 箱の底に
 7 ヘイヌ めずらしい内緒の隠し財産を
 8 ヘイヌ 持っているのです。
 9 ヘイヌ 箱の底に
 10 ヘイヌ 珍しい宝刀を
 11 ヘイヌ 持っているのです。
 12 ヘイヌ 私の考えたとおりに
 13 ヘイヌ 考えて
 14 ヘイヌ 私の言うとおりに
 15 ヘイヌ 承知して
 16 ヘイヌ くださいませ。
 17 ヘイヌ 私のせいであなたが人々から
 18 ヘイヌ 厳しい談判を受けたなら、
 19 ヘイヌ あなたの前に
 20 ヘイヌ 罰金を出して謝り
 21 ヘイヌ ますから、
 22 ヘイヌ どうか承諾して
 23 ヘイヌ ください。」
 24 ヘイヌ と私は言いましたけれど、
 25 **C** ヘイヌ なにか悪口でも
 26 ヘイヌ 私が言ったみたいに
 27 ヘイヌ 彼の顔のおもてに
 28 ヘイヌ その腹立ちが
 29 ヘイヌ 一面に現れました。
 30 ヘイヌ そのさなかに
 31 ヘイヌ 彼はパッととび起きて
 32 ヘイヌ 横の壁に掛かった刀を
 33 ヘイヌ サッと手にとり
 34 ヘイヌ 自分の体を刺しました。
 35 ヘイヌ
 (ここから節なしの語りになっている)
 36 そこに私は行って
 37 その刀を引き抜き、
 38 「あなたがすぐ死ぬことになっていたの
 39 なら、
 40 刀身についた血が乾いてドロリとなるで
 41 しょう。
 42 生きることになっていたのなら、
 43 生血がそのまま流れるでしょうから。」と
 44 言いながら
 45 その刀を引抜ききますと、
 46 血が乾いてドロリとなりました。
 47 「あなたがすぐ死にぬのでしたら、
 48 私も死にますわ」
 49 と言いながら、
 50 その刀で、
 51 私は自分の体を刺しました。
 (ここから韻文調)
 52 **D** 天井の梁の上に
 53 ヘイヌ 私は手をダランと下げて
 54 ヘイヌ いたのでした。
 55 ヘイヌ 煙出し穴を通して
 56 ヘイヌ 私は外へ飛び出しました。
 57 **E** ヘイヌ 白い雲が橋になって
 58 ヘイヌ 先へと伸びて行き
 59 ヘイヌ 明るく光っています。
 60 ヘイヌ 白い雲の橋を
 61 ヘイヌ 渡って進んで
 62 ヘイヌ 行きますと、
 63 ヘイヌ 人の大勢住む村がありました。
 64 ヘイヌ 村の入口で
 65 ヘイヌ 私は犬にほえられました。
 66 **E'** ヘイヌ 村おさの家の門口に
 67 ヘイヌ 行きましたが、
 68 ヘイヌ 娘たちの一群
 69 ヘイヌ 若者たちの一群が
 70 ヘイヌ 臼でヒエつきをしています。
 71 ヘイヌ 家の中から
 72 ヘイヌ 小沙流の人が
 73 ヘイヌ 訴えている声が
 74 ヘイヌ カッコウの声みたいに
 75 ヘイヌ はっきり聞こえてきます。
 76 **D'** ヘイヌ そうすると
 77 ヘイヌ 「そういう悪い女
 78 ヘイヌ 精神の悪い女が
 79 ヘイヌ 来ているぞ。
 80 ヘイヌ 臼に入れて鎌で突け！
 81 ヘイヌ 臼に入れて杵で突け！」
 82 ヘイヌ という声がしましたが、
 83 ヘイヌ でたらめを
 84 ヘイヌ 言っているのだと
 85 ヘイヌ 私は思っていますと、
 86 ヘイヌ 臼に入れて杵で突き、
 87 ヘイヌ 私は臼に入れられて鎌で突かれ
 88 ました。
 89 ヘイヌ さんざんやられたあげく
 90 ヘイヌ 国造りの神様が
 91 ヘイヌ 私をあわれんで

- 89 ヘイヌ
(ここから最後まで語りになっている)
- 90 赤血鳥に
- 91 私を変えてくださって
- 92 私は帰って来ました。
- 93 私の家の前に
- 94 帰って来たのでした。と、
- 95 C´若いメナシの女の
- 96 姉妹が
- 97 いたのですが、
- 98 姉のほうに死に
- 99 自殺ですから
- 100 ひとには何もわからずに
- 101 自殺したのです。
- 102 若者と一緒に
- 103 自殺したのですが、
- 104 焼けこげた柱を、
- 105 赤血鳥が
- 106 のぼったりおりたりしながら、
- 107 私の姉さんが
- 108 嘆き話をしたのですから、
- 109 B´これからの人たちは
- 110 どんなにほれた男
- 111 よい男に
- 112 ほれても、
- 113 女のほうから求婚するのは
- 114 恐ろしいことなのですから、
- 115 これからの女は
- 116 決して自分のほうから
- 117 男に求婚しないほうが
- 118 いいですよ、と
- 119 A´妹のほうの女性が
- 120 赤血鳥が
- 121 柱をのぼりおりしながら
- 122 言うのを聞きました、
- 123 とさ。

テキスト「小沙流の人」には、下記の交差対句が見出される。なお、括弧内に示した数字は、テキストの行番である。

- A 私はこう言いました
- B メナシの女の求婚の場面
- C 自殺の場面
- D 手をだらりとする
外に飛び出す

- E 白い雲の橋
犬に吠えられる
- E´ヒエ突き
カッコウのような声
- D´白に入れられ杵で突かれる
帰ってくる
- C´自殺について
- B´女性からの求婚についての教訓
- A´赤血鳥の言葉

この交差対句をパターン①にあてはめると次のようになる。

◆パターン①と「小沙流の人」の対比

〈パターン①〉	〈テキスト〉
I :【緒言】	: A
II :【暮らし A】	: B
III :【移動 A】	: C
IV :【侵入】	: D
V :【緊張 A】	: E
V´ :【緊張 B】	: E´
IV´ :【退出】	: D´
III´ :【移動 B】	: C´
II´ :【暮らし B】	: B´
I´ :【結語】	: A´

ここでの A は、物語の開始を表明する言葉であるのに対し、A´ は、物語の終了を表明する言葉である。したがって、A・A´ は【緒言】と【結語】である。

B は、「女」が求婚する場面であるのに対し、B´ には、女性からの求婚が禁忌事項であり、それを戒めるための教訓が書かれている。つまり、B には、「国造りの神」が「女」を「赤血鳥」に変える前の様子書かれており、B´ には、変えられた後の様子ならびに、この出来事によって得られた教訓が書かれている。この教訓は、これから暮らす多くの人たちに向けられている。したがって、これらは、【暮らし A】と【暮らし B】に該当すると思われる。

また、C は「自殺」の場面であり、C´ にはその「自殺」に対して言及した箇所である。一見すると、「自殺」は【移動】とは無関係に見えるかもしれない。しかし、「死」を、体から「ラマツ(魂)」が抜け出すことであるとアイヌの人たちは解釈している。「ラマツ」は「死」によって、「アイヌモ

シリ（人間の国）」から「カムイモシリ（神の国）」へと移動をすることになる。したがって、「自殺」は【移動】に該当すると判断した。「女」は「死」によって家の煙突から抜けだし、空へと向かう。外に飛び出した「女」は「白い雲」「犬の声」と「ヒエ突き」「カッコウのような声」と出会う。そして、「女」は「国造りの神」によって再び帰ってくる。

Dには、「女」が手をダランとたらしめた様子に続き、煙突から家の外に飛び出す場面が配置されている。それに対応するD'には、「女」がさんざん杵で突かれた様子があり、その後には、「国造りの神」が「女」を「赤血鳥」に変えて帰ってくる場面である。「女」はおそらく杵で突かれぐったりしたであろう。その様子は、「女」が手をダランとたらし様子に似ている。ここで、「小沙流の人」の場合は、抜け出した「ラマツ」が家の外へと飛び出している。また、「国造りの神」によって「赤血鳥」に変えられた「女」は、再び家へと帰ってくる。この場合、家の煙突から飛び出た「空」が、【緊張】をもたらす環境であると解釈できる。そのように解釈すると、D・D'は【侵入】・【退出】に相当する。

続いて、E・E'の対応についてである。ヒエを突く作業によって白い煙のようなものが立ち昇る様子を、「トワトワト」^[7]では、狐が火事によって煙が立ち上る様子と誤解した場面がある^[9]。このEの「白い雲」とE'「ヒエ突き」の関係も、「トワトワト」の場合と同様に、「ヒエ突き」と「白い雲」とを関連させていると解釈できる。また、「白い雲」と「ヒエ突き」の後には「犬の声」と「カッコウのような声」というように、共に「声」が配置されている。

見えたもの 聞こえたもの

E : ヒエ突き 犬の声
E' : 白い雲 カッコウのような声

この箇所が【緊張】であるとすれば、本来ならば、この箇所が、物語全体からみると最も緊迫感のある「生命的危機」の場でなければならない。しかしながら、「小沙流の人」の場合は、この箇所にさほどの緊迫感がない。また、主人公の「女」は、E・E'で何らかの変化を遂げているのではない。むしろ、物語全体から見ると、「生命的危機」はC・C'にある。また、「女」の変化はDで遂げられる。

3.2. パターン②の事例

本節では、パターン②に該当するテキストを3例示す。

3.2.1. 「ハリギリで舟を作った男のウエペケレ」

本節では、松島トミを話者とするウエペケレ「ハリギリで舟を作った男のウエペケレ」^[10]での事例を紹介する。

A イシカリの奥に母と父がいて私は暮らしていたところ、一人っ子の男の子が私であったので父と母はとても私をかわいがった。まだ幼い頃から神を祭ることもいろいろなものを作ることを私に教えてくれたので男のすることはなにを出来ないということもなく暮らしていた男の子となってだんだんと私が成長したのでなおいっそう両親は喜んでなにもかも全て私に教えた。
B なんでもそれからは、私が上手になったので私を誉めながら父と一緒に山へ狩に行ってもなんとまあ、獲物に恵まれて見たこともないほどに私がたくさんの獲物をとったのでなおいっそう父が私をかわいがると私のことを喜んで連れ立って狩猟をしたり、海の漁をしてばかり暮らしていたところ、だんだん大きくなって一人前の男になったのでなんでも作りたくなくて作っていたところいつの頃からか、舟を作ってみたくなったのでカツラの舟を作ったのであった。カツラの舟を作ったところ、とても軽かったので船足が速くて、海であっても乗って行き来しながらいたところいつの頃からかこんどはハリギリの舟をどうしたわけか作りたくなくてハリギリの舟を作った。するとそのハリギリの舟はとても重くて私が乗って旅することもできなかった。
C① とても重くて速く進むことができないのであのカツラの舟ばかりに私は乗って、軽かったので速く漕げるので海の仕事で乗って行き来していたのだが、いつの頃からか真夜中になると舟の音がしきりになった。舟がぶつかり合う音のように恐ろしいほど音がする中で毎晩、暮らしていた私であったが、ある日…夜になるとまた、あの物音がした。そっと父へ話もせず、言いもしないで、川原へ静かに下りて見たところ、その舟たちはつながれたままになっていた。なんの音もなんの声もないようだった。

C②そこから帰って横になるとまた、例の物音がしたけれどもどうも思わないで毎晩、このように真夜中になるとしきりに物音がしたけれどもものすごく毎晩このように物音がしたので私は不思議だったのでそと起きて静かに外に出て川原へ下りて見ると、まさかこのように見るとは思っていなかったがそのつながれた舟たちが立ち、人間が立っているかのようにになって、本当に互いにぶつかりあって取っ組み合っている様子を私は見て、とても恐ろしくなった。激しい怒りがわきおこったけれども向きを変えて私は帰った。私は驚いたために反対に帰って自宅に来てどうして舟たちは人間が立ったようになって怒鳴りあいながらいたのかと思うと眠ることもできずにいたあげく、眠るか起きるかしていると美しい神様が、それこそ神々しい娘が私のそばに立って、「ここにいる全くの若者よ。私が言うことをよく聞きなさい。私というのは、カツラの舟というのは女である。なにゆえにこのようなハリギリの木ほど悪い精神を持った木はないものなのに重くて旅をすることもできない木を、お前がわからずにこのようなハリギリの舟を作ってからとてもそれが私を怒鳴りつけるようになった。夜になると私を怒鳴って私はカツラの木の舟の女であるから今にも私が負けそうになったけれども頑張る夜になるとこのように怒鳴りあって取っ組み合いながらいたものだったのでそのままにしておいたならば悪くなるように思う、悪い予感がするぞ。明日、お前が起きたならそのハリギリの舟を割って割って、大きな木っ端と小さな木っ端を全部お前が燃やし終えたら山に行行ってその切り株を、ハリギリの切り株を掘り起こして近くの根っこと遠くの根っこの全てをお前が掘り起こして一つも残さずに燃やしてしまうのだぞ。そのようにしなかったら悪いことが起きると思うぞ。覚えておけ」と言うとおぼと消えてしまった。ははー、本当にこのようなことを見ただけでも驚きなのだがと思いながら朝を待っていたところ私の母が起きて食事の準備をするような音がしたので私が起きると私の父も起きたのであった。

C③「実は夕べ、真夜中になって眠るとこのように舟の音がしきりになった。舟が取っ組み合う音のようになりつづけて私が下りて見たところ、その舟は人間が立っているかのようにになっていた。つながれた舟のままでも恐ろしいように取っ

組み合う様子を見ただけで私はびっくりして逆方向に私は帰って家の中に入ったのであったが女神が警告するために来たのです」と父へ言う。「大変だ。そういうことなら、早く、それをドンドン割ってバリバリに裂いて燃やしてしまうんだぞ」と言ったので私はさっと食事をすませてすぐ、とても怒りがわきおこったので川原へ下りてそのハリギリの舟をどンドン割ってバリバリ裂いて全てを燃やした。大きな木っ端と小さな木っ端を一つも残さずに燃やしてしまったのであった。そして燃えてしまったので自宅に帰って、「今、燃やし終わって来ました」と私が言う。「とにもかくにも、お前が山へ行行ってその根っこを掘って近くの根っこと遠くの根っこを掘って燃やしなさい。それから燃え終わった方でその煙がどこへ行くのかを見るのだぞ」と父が言うのであった。そして山へ行行ってそのハリギリの切り株を掘り返して近くの根っこと遠くの根っこを一つも残さずに全て小さな木っ端も大きな木っ端も葉っぱも全部燃やした。さっさと燃えるものなので、私はすばやく全てを燃やした。今、燃え終わった方向にその煙が高いところにある天へ登るようにしていたのであったが、海の上にその煙がずって進み行くのであった。煙が海の上に行った様子を見ただけでももう燃え終わったので自宅へ下がって行くとお父が「どこへ煙が昇った？」と言ったのでかくかくしかじかと「海の方へなびいて行った」と言う。「大変なことだ。三年、四年は海の仕事をしなさいぞ」と父が言うのであった。そして、私は海の仕事をしないで山で、川のところから、山で仕事を三年が過ぎた。四年目に入ってもう四年がたつ頃なのでもうよいだろうと私は思って、父へ言ってもせずに四年が過ぎてから沖に出ればよかったんだけどもイシカリの青年を一人連れて誘って海の仕事をした。

C´①そのカツラの舟に乗ってどこまで行っても一匹の魚も取れなかった。とてもあきれて海のずっと沖の方へ行行ったところでも一匹の魚もとれなかった。とてもあきれて「もう帰り時だ」と言う、舟の向きを変えるため動く、まさかこのように海がかきまざり泡立ち、揺れに揺れて恐ろしい状態になった所から化け物がわき上がった。その海面が揺れてかき混ざるところから化け物が浮き上がって本当に大きな悪い神の妖怪となって口から耳まで裂けたような妖

怪は赤い布をくわえさせられたようであった。何か浮き上がって私たちは驚いたのでひたすら舟の向きを変えて逃げて、恐ろしくて舟を走らせて逃げてもその化け物が追いかけて舟尻を今にももう少しでつかまえられそうになったがそうしてもどうすることもできなかったため、神への祈りも父から教えられていた私であったので「タコの神様、このように妖怪が現れて追いかけて、ほどなく舟がわしづかみにされそうです。タコの神様よ、母から、先祖から祭られたお方がタコの神様のあなたでした。私を助けてください」と祈りを捧げながら舟を走らせたのだが、と、本当に舟の尻がグラグラと泡立ったと思うと、そこから浮き上がった神様が海面に目があかあかと光っている化け物と取っ組み合う様子を見た。自分の後ろを見ながら私は舟を走らせた。恐ろしいので舟を走らせているとタコの神様が負けてしまったようでまた追いかけてその化け物が今にも舟尻をつかまれそうになったけれども本当に自分が生きるか死ぬのか、わからなくなってあわてていたの、こんどまた「海の神様、海の長老よ、タコの神様が負けました。

C´②先祖から、母から祭られたお方、海の長老よ、早く私どもを助けてくださいませ」と私が祈って拝みながら舟を走らせると本当に神様が浮かび上がった様子をあかあかと海面がグラグラと湧きかえってその化け物と取っ組み合いながらいた様子を自分の後ろに一瞬見た。

C´③イシカリの石原がもう近いように思ったところ、なんとイシカリの年寄りも若者もあちらから大勢で走ってかけつけて来る様子を見たので大きな声を出して、もう浜の石原に近い様子を見たので「若者たちは帰りなさい。若者たちは帰って年寄りたちが来てください」と私は叫んだ。私が大声で叫ぶとそれが聞こえたらしく若者たちが帰った。年寄りたちがかけつけて川原にやって来た様子をさっと見た。どう行動したのか、家の中に上がっているのか、海にころんでいるのか、私がどうしたことなのか、わからないあげく、生きているのか、死んだのか、私はわからずに三年もそのようになっていた。私の父母が、老いた母たちが私を看病しながら三年も、今は四年になった頃に意識を取り戻させてくれたのであった。

B´私が見たところ、本当に起きることも動くこ

とも全くできなくなって、それこそ、自分の足の肉も全部腐ってしまったのか、全て肉が落ちてしまった。睫毛もなくなった。眉毛もなくなった。髪の毛もなくなった。髭もなくなった。本当にどう、したことなのか私はわからずに本当に赤いかぼちやのように私はなってしまった。私は恐ろしくなるとてもあきれてしまった。化け物の息吹をかぶってしまったのだなと思った。そして、もう生きたままに屍になって後悔した。まだ、若かった私だったが、妻を持つこともできない子供を持つこともできないでこのようなお化けのように私はなったのだと思って泣いていると、イシカリの旦那さんたちが狩りをして下りると、家の外に捨てて行くとうめきながら母や父がそれを入れて煮て私に食事を作ってくれていた。

気がついてみると本当に怖い姿になってしまったので一人の若者が来て、「仲間の頭、立派な首領らしくいた者がこのようにどうしてこんなふうな睫毛もない、頭の毛もない、髭もない眉毛もなくなったのか。A´本当に妖怪のようにどうしてなってしまったのか？」と私に訊ねた若者が一人いたので「実は私はわからないでハリギリの舟を作って、乗りもしなかった。ハリギリほど、木のなかで精神の悪い木はなかったことを知らずにこのように舟を作って、こんな苦しみを味わったので今いる若者よ、和人もアイヌも決して決して、ハリギリの木は作ってはならないぞ」とその若者が教えを言い残して死んだということだ。ハリギリほど悪い精神を持った木はないのだから覚えておきなさい。と本当の旦那が物語ったのです。

このテキストでは、次のような交差対句を確認することができる。

- A 若者の紹介
- B 一人前になった若者
- C ①カツラの舟とハリギリの舟の闘い
②カツラの舟とハリギリの舟の闘い
③三・四年の歳月
- C´ ①タコの神と化け物の闘い
②海の長老と化け物の闘い
③三・四年の歳月
- B´ 恐ろしい姿になった若者
- A´ 教訓

ここで、AとA´、BとB´は、パターン①の場合と同様に【緒言】と【結語】、【暮らしA】と【暮らしB】に該当する。

また、C・C´については、比較的広範囲に及ぶ並行箇所である。

◆パターン②と「ハリギリで舟を作った男のウエペケレ」の対比

〈パターン②〉	〈テキスト〉
I : 【緒言】	: A
II : 【暮らしA】	: B
III : 【並行箇所A】	: C
III´ : 【並行箇所B】	: C´
II´ : 【暮らしB】	: B´
I´ : 【結語】	: A´

3.2.2. 「カニの話」

本節では、浅井タケによるトウイタハ「カニの話」^[11]を示す。

A サンヌピシ村に一人の男が妻と一緒に住んでいたとき。B 妻と一緒に住んでいてマキをとりに山へ行ったらマキを炊き、魚をとっては食べ、していたが、ある日女がユリ根を掘りに山へ行ったとき。それで山へ行ったあとで男は妻に玉の付いたフンドシを注文したとき。

(玉のついたフンドシ?M) うん。フンドシ。tepa はフンドシのことだ。玉のついたフンドシを作って妻は夫にあげてからユリ根掘りに山へ行ったとき。

それから、その男は、浜辺で、川に出て、海に出て、浜辺に座って、歌ったとき。

'amukita 'amukita monimahpo

yanuwa hetaa, tuntu nii,

riih rih see

'amukita 'amukita monimahpo,

yanuwa hetaa, tuntu nii,

riih rih see

と言ったとき。そうしているうちに海の方から、「いま泳いでいくよいま泳いでいくよ。」

と言うので、見たら、子どもが一人、浜にaggattetとき。

子どもが一人aggattetの見たら、カニだったとき。

カニaggattet、男のそばにやって来て、男の

食べ物をあれやこれやと食べたとき。食べてたべて、男の玉のついたふんどしから玉をぬいてしまったとき。ぬいてぬいてしまったから、それから、海の沖の方へ出ていったとき(笑声)。その後で、男は家に帰って、またその食物を食べたとき。女が山から帰って来たとき。山から下りてきてヤムユリ根も煮てたべたとき。そうしているうち、またある日男は女が山に上っていった後で、またその玉のついたフンドシを注文したとき。そうしてまた女は玉のついたフンドシを作って夫にあげて自分は山へ上っていったとき。その後で男はそのフンドシをもって食物も作ってハンカタにそれを入れたとき。サラニヒに入れて抱えて、それから浜の方へ下りて、それから下りて浜辺でまた歌ったとき。

'amukita 'amukita monimahpo

yanuu hetaa

tuntu nii riirih see

'amukita 'amukita monimahpo

yanuu hetaa

tuntu nii riirih see

と言ったとき。そうしたら、海の方から、「いま泳いでいくよ、いま泳いでいくよ。」と言ったとき。上がってくるのを見たら一人の子どもが泳いで上がってくるのを見たら、カニだったとき。

そして、男が作ってサラニヒに入れた食べ物を食べてそれから、男の玉のついたフンドシの玉を抜いて抜いてしまってまた、海の沖の方へ出ていったとき。

その後で、家へ帰って火をたいたとき。女が山から帰ってきてその男、その夫が、たった今寝床から寝て起きたばかりの人のようにして、火を炊いているのを見たのだった。

C①そうしてから、しばらくたったある日、その男はマキとりに山に行ったとき、山の方へ。②マキとりに山に行くとその後でその女は「どうしてこの男こうなんだろう。(どうして)毎日毎日、今寝たばかりの人のようにしているんだろう。」

③と思ったから、いま玉のついたフンドシを作ってから浜に下りて、今夫がいなくなった後で、浜に下りて行って歌ったとき。

'amukita 'amukita monimahpo

yanuu hetaa tuntu nii

rihrih see'amukita 'amukita monimahpoyanuu hetaa tuntu niirihrih see

と言っている、海の方から子どもが一人上が
ってきて、後頭部(まちがえた)おでこを押さ
えて上がって来たとき。上がって来て、

「ねえ、男。お前の声がちょっと違うから上が
って行かないよ。」

と言って入ったとき。海へ入って行ったとき。

すると、その女は

「あのねえ、風邪をひいたのだよ。風邪をひい
たから、私の声が変わったのだよ。」と言ったと
さ。

そうして今その男、いや娘が海の方から、

「泳いでいくよ、泳いでいくよ。」

といてあがってきた。見るとカニだったとき。

④カニが来て、女の食べ物をサラヒニに入れた
ものをそこで食べたとき。食べてしまったから、
その女は、カニがフンドシの玉を抜こうとした
ところを、その頭を叩いて頭をつぶして、カニ
は死んでしまったとき。

それからそのカニを持って家へ帰って、煮て食
べて、それから頭や…、(足の)殻をみんないろ
りの穴へあけてから、いろいろの穴の中へ殻を入
れておいたとき。

C´①そして今、男が山から下りて来たとき。マ
キをとって帰って来て、今ごはんを食べてから、
その女はまたユリ根掘りに山へ行ったのだとき。

②行った後でその女、デナイ、その男は今玉の
ついたフンドシを作って浜へ下りて行ったとき。

③浜へ下りて行って歌った。

'amukita 'amukita monimahpoyanuu hetaa tuntu niiriihrih see'amukita 'amukita monimahpoyanuu hetaa tuntu niiriihrih see

と言ったとき。

そう言っているうちに、海の上が動いたとき。

それで、(大きい声でお願いします。M)動いた。
海の水が動いた。

そうして、

「ねえ、男、お前の声が違うので上がって行か
ないよ。」

と言ったとき。

そう言ったので、その男はこう言ったとき。

「あのね、風邪をひいたから、私の声が変わっ
たのだよ。」

と言ったとき。

そうしてそれからまた、

'amukita 'amukita monimahpoyanuu hetaa tuntu niiriihrih see

と言いながら、海の上から海の水が動いたとき。

そうしてから海の上から

「泳いでいくよ。泳いで行くよ。」

と言って上がって来たとき。

「実はね、男。お前の妻の女が、こんなふう
にして私が行くと、私を叩いて、私を殺してしま
って、今私の魂だけがあるんだ。」と言ったとき。
魂だけがあると、そのまま沖へ帰って行
ったとき。行ったとき。

そうしてその後で男は今家へ帰ったとき。家へ
帰って今そこで寝たとき。

④そうしているうちに、女が山から帰って来た。
ユリ根掘りをして下りて来たとき。下りて来て、
男はいろいろの方を見ると、いろいろの穴の中にカ
ニの殻が入れてあったとき。

入れてあったから、「本当に女がカニを殺した
んだな。」と思ったので、そこで妻を叩いて叩い
てから殺して外へ投げたとき。

B´そうしてから一人で暮らしたとき。一人でい
るうちに、白鳥たちが空を飛びながらもこう言
ったとき。

takahka so'eere, yaysame koo kohko.takahka so'eere, yaysame koo kohko.

と、なきながら飛んで行ったとき。飛んで行っ
たんだ。

だから男は、それが恥ずかしくて本当に今ふと
んをかぶって寝たけれども、死にはしなかった
とき。

A´それから起き上がって、家の中のものを、
片付けていると、針刺しが見つかったとき。そ
の針刺しを見たら、中に太いクツを作る針が刺
してあったとき。その針をとって、その脇の下
から針を入れて刺したとき。刺して、そこで、
男は死んだとき。

それで終わり。

このトゥイタハは、次のような構造として示される。

A 登場人物の紹介

B 男の生活

- C ①男が山に行く
②女が浜に行く
③カニとの会話
④カニを殺して殻を捨てる

- C´ ①男が山から戻る
②男が浜に行く
③カニとの会話
④カニの殻を見つける 女を殺す

B´ 男の生活

A´ 主人公の死

ここで、Aは、物語の導入部であり登場人物の紹介でもある。それに対して、A´は、主人公の「男」が死に、物語が閉じられる場面である。この箇所は【緒言】と【結語】である。

Bには、「男」が「カニ」と関わる暮らしが書かれており、B´には、「女」が「カニ」を殺す一連の出来事の後での「男」の暮らしが描かれている。

CとC´は並行箇所である。Cは「女」と「カニ」との関わりが書かれており、C´には「男」と「カニ」のラマツ（魂）との関わりが書かれている。

◆パターン②と「カニの話」の対比

〈パターン②〉 (テキスト)

- I :【緒言】 : A
II :【暮らし A】 : B
III :【並行箇所 A】 : C
III´ :【並行箇所 B】 : C´
II´ :【暮らし B】 : B´
I´ :【結語】 : A´

3.2.3. 「この砂赤い赤い」

本節は、『アイヌ神謡集』^[7]に掲載された「この砂赤い赤い」である。ジャンルとしてはカムイユカラに分類される。

- 1 A [この砂赤い赤い]
- 2 ある日に流れをさかのぼって遊びに
- 3 出かけたら、悪魔の子に出会った。
- 4 いつでも悪魔の子は様子が美しい
- 5 顔が美しい。黒い衣を着けて胡桃の小弓に胡桃の小矢を持っていて

- 6 私を見ると、ニコニコして
- 7 いうことには、
- 8 「小オキキリムイ、遊ぼう。」
- 9 B①さあこれから、魚の根を絶やして見せよう。」
- 10 と言って、胡桃の小弓に胡桃の小矢を番え水源の方へ矢を射放すと、
- 11 水源から胡桃の水、濁った水が
- 12 流れ出し、鮭どもが上って来ると
- 13 胡桃の水が厭なので泣きながら
- 14 引き返して流れて行く。悪魔の子は
- 15 それをニコニコしている。
- 16 ②私はそれを見て腹が立ったので
- 17 私の持っていた、銀の小弓に銀の小矢を
- 18 番え水源へ矢を射はなすと
- 19 水源から銀の水、清い水が
- 20 流れ出し、泣きながら流れて行った
- 21 鮭どもは清い水に元気を回復し
- 22 大笑いをして遊びさわいで
- 23 パチャパチャ川を上って行った。
- 24 ③すると、悪魔の子は、持前の癩癩を
- 25 顔に表して、
- 26 B①´「本当にお前そんな事をするなら、鹿の根を
- 27 絶やして見せよう。」と云って、
- 28 胡桃の小弓に胡桃の小矢を番え
- 29 大空を射ると、山の木原から
- 30 胡桃の風、つむじ風が吹いて来て
- 31 山の木原から、牡鹿の群は別に
- 32 牝鹿の群はまた別に、風に吹き上げられ
- 33 ずーっと天空へきれいにならんで上って行く。
- 34 悪魔の子はニコニコしている。
- 35 ②´それを見た私はかっとう癩にさわったので
- 36 銀の小弓に銀の小矢を
- 37 番えて、鹿の群のあとへ矢を射放すと、
- 38 天上から、銀の風、清い風が
- 39 吹き降り、牡鹿の群は
- 40 別に、牝鹿の群はまた別に、
- 41 山の木原の上へ吹き下された。
- 42 ③´すると、悪魔の子は
- 43 持前の癩癩を顔に現し、
- 44 「生意気な、本当に
- 45 お前そんな事をするなら、力競べをやるう。」
- 46 と云いながら上衣を脱いだ。

- 47 私も薄衣一枚になって
 48 組み付いた。彼も私に組み付いた。A´それからは
 49 互に下にしたり上にしあったり相撲をとったが、
 50 大へんに悪魔の子が力のある事には
 51 驚いた。けれども、とうとう、ある時間に、
 52 私は腰の力、からだの力を
 53 みんな出して、悪魔の子を
 54 肩の上まで引っ担ぎ、
 55 山の岩の上へ彼を打ちつけた音が
 56 がんと響いた。殺してしまって地獄へ
 57 踏み落したあとはしんと静まり返った。
 58 それが済んで、私は流れに沿って帰って来ると、
 59 川の中では鮭どもが笑う声
 60 遊ぶ声がかまびすしくのぼって来るのが
 61 パチャパチャきこえる。山の木原では、
 62 牡鹿ども、牝鹿どもが笑う声
 63 遊ぶ声がそこら一ぱいになって
 64 そこにここに物を
 65 食べている。私はそれを見て
 66 安心をし、私の家へ
 67 帰って来た。
 68 と、小さいオキキリムイが物語った。

「この砂赤い赤い」は、次のような構造である。

- A 「悪魔の子」の出現
 B① 魚たちに悪戯をしてニコニコする「悪魔の子」
 ② 「悪魔の子」の「悪い行い」に腹を立て、魚たちを呼び戻す「小さなオキキリムイ」
 ③ 癩癩を起こす「悪魔の子」
 B①´ 鹿たちに悪戯をしてニコニコする「悪魔の子」
 ②´ 「悪魔の子」の「悪い行い」に腹を立て、鹿たちを呼び戻す「小さなオキキリムイ」
 ③´ 癩癩を起こす「悪魔の子」
 A´ 地獄へ追いやられる「悪魔の子」

このテキストの場合、AとA´では、「悪魔の子」の出現と、地獄に送られる「悪魔の子」が対応すると解釈できる。Aには、3.2.1節や3.2.2節のテキストに確認されるような、主人公の紹介が記された【緒言】は割愛されている。それに対して、

68行目には【結語】がある。また、AとA´はこの物語における一連の出来事の前後の暮らし【暮らしA】・【暮らしB】である。

また、BとB´については、「悪魔の子」が悪戯をする対象は「魚たち」と「鹿たち」で異なっているもの、ほとんど同じような内容が再現されている。したがって、この箇所は【並行箇所A】と【並行箇所B】である。

◆パターン②と「この砂赤い赤い」の対比

〈パターン②〉	〈テキスト〉
I : 【緒言】	: 省略されている
II : 【暮らしA】	: A
III : 【並行箇所A】	: B
III´ : 【並行箇所B】	: B´
II´ : 【暮らしB】	: A´
I´ : 【結語】	: A´

4. おわりに

本稿では、アイヌ口頭文芸テキストに見出される2種類の構造パターンを紹介した。なお、この2パターンについて、本稿では、便宜上、パターン①・パターン②とした。また、パターン①では5例、パターン②では3例についての資料を本稿では提示している。

パターン①の事例においては、例えば3.1.5節の「小沙流の人」では、【緊張A】・【緊張B】に該当すると筆者が判断した箇所に、「生命的危機」や「変化」が見出せない。また、パターン②では、例えば3.2.3節の「この砂赤い赤い」には【緒言】が見出せない。このように、本稿で示したそれぞれの事例は、それぞれのパターンに対して厳格にあてはまっているという訳ではない。むしろ、本稿で示したような、テキストの類型化に関わる研究には、一般的にも恣意による影響が介入する余地があると考えられている。この点については、筆者は異存がなく、本稿の方法論における課題であると認識している。同時に、1節で述べたように、全てのアイヌ口承テキストが、本稿で示した2種類のパターンに分類されるという主張を本稿で述べているのではない。こうした前提のもと、本稿では、アイヌ口承テキストに見出される2パターンと、それぞれのパターンに該当する事例を資料として提示した。今後、本稿において示されていないパターンについての調査を含めた検討を行う予定である。

引用文献

- [1]大喜多紀明.『アイヌ神謡集』に掲載されたカムイユカラについての考察—修辞論的視点より—.人間生活文化研究. 2012(22), p. 147-158.
- [2]大喜多紀明. アイヌ女性叙事詩『スズメの酒盛り』についての考察—交差対句と心意—. アジア民族文化研究. 2012(11), p. 181-213.
- [3]大喜多紀明. 「アイヌ神謡」の修辞パターンから心意を辿る(上)—「交差対句」を糸口として—. 西郊民俗. 2011(217), p. 24-32.
- [4]田村すず子. サダモさんの昔話: 沙流方言: 民話5]. アイヌ語音声資料. 1986(3), p. 28-31.
- [5]田村すず子. 二風谷の昔話と歌謡・神謡: 民話5. アイヌ語音声資料. 1988(5), p. 74-81.
- [6]知里真志保. アイヌ民譚集. 2009年第10刷, 岩波書店, 1981.
- [7]知里幸恵. アイヌ神謡集. 2004年第35刷, 岩波書店, 1978.
- [8]田村すず子. 二風谷の昔話と歌謡・神謡: 神謡. アイヌ語音声資料. 1988(5), p. 67-73.
- [9]大喜多紀明. 「アイヌ神謡」の修辞パターンから心意を辿る(下)—「交差対句」を糸口として—. 西郊民俗. 2012(218), p. 25-28.
- [10]大谷洋一. 〈調査報告〉松島トミさんの口承文芸5. 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要. 2003(9), p. 81-116.
- [11]東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. “『浅井タケ昔話全集 I, II』村崎恭子 編訳”. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/murasaki/asai01.html, (参照 2012-1-5).

Abstract

The author checked and showed two kinds of typical sequence patterns in Ainu oral texts. These patterns are based on the rhetoric technique as symmetry. In this paper, the analytical data based on the investigation of rhetorical patterns in each text are shown. It can check that there are two kinds of typical sequence patterns in Ainu oral texts.

(受付日: 2013年1月26日, 受理日: 2013年2月4日)



大喜多 紀明 (おおぎた のりあき)

所属: アジア民族文化学会

修士(理学) 東京工業大学大学院総合理工学研究科.

専門: アイヌ民族の口頭資料についての研究. 現在は, 特に, 修辞論的な視点からの研究を行っている.

主な論文: 「アイヌ女性叙事詩「スズメの酒盛り」についての考察—交差対句と心意—」(アジア民族文化研究, 第11号)